

## ルカ文書の物語的統一性

山田 耕太

### I

ルカ文書（すなわち、ルカ福音書と使徒言行録）は、語彙のレベルにおいても、文体のレベルにおいても、文学的用法のレベルにおいても、思想内容のレベルにおいても、一つの連続した著作であり、両者は一つの体を成す第1巻と第2巻である、という共通の理解が、近年の批評的研究の結果得られてきたと思われる。このようなルカ文書の統一性を強調して、既に今世紀始めにH. キャドベリーは、ルカ福音書と使徒言行録をハイフンで結んだ“Luke-Acts”という造語を作り出した<sup>(1)</sup>。現在ではこの用語がかなり一般的に用いられている。

しかし、このようなかなり「一致した見解」(opinio communis)に対して、最近になって福音書のジャンルや使徒言行録のジャンルを巡る議論が活発になってきたことと関連して、一方ではM. C. パーソンズとR. I. パーヴォは、ルカ福音書と使徒言行録に見られる相違点から、ジャンルの統一性、物語的統一性、神学的統一性という三つの視点で、ルカ文書の統一性という共通理解を問い直している<sup>(2)</sup>。これに対して、他方では、C. K. バレットやH. I. マーシャルは、ルカ文書の文学的統一性を改めて弁護している<sup>(3)</sup>。本稿では、ジャンルの統一性や神学的統一性ではなく文学的統一性の視点から、主要な点では、とりわけ物語的統一性という視点から、ルカ文書の統一性の問題を論じてみたい。

ルカ文書を構成する二つの著作、ルカ福音書と使徒言行録の関係は、主に四つの立場から把握されている。第一に、ルカ文書は異なる著者が著した別々の著作である、という立場。第二に、ルカ文書は同じ著者による一つの著作を、後に二つの著作に分割した、という立場。以上の二つの立場は、現在では支持者は多くはない。第三に、ルカ文書は同じ著者による別々な著作である、という立場。すなわち、使徒言行録はルカ福音書を書いた時点では、まだ構想されておらず、ルカ福音書の後に書き加えられた続編であり、両著作のジャンルは異なる、と考える立場である。第四に、ルカ文書は同じ著者による統一した著作であり、ルカ福

音書と使徒言行録は、ほぼ同時期に書かれたとも少し時間をおいて書かれたとも考えられるが、同時に構想され、両著作は同じジャンルのものである、という立場である。第一、第二の両極端な立場に対して、現在では第三と第四の立場を巡って議論が盛んになりつつある。

## II

第一に、ルカ福音書と使徒言行録は異なる著者が著した別々の著作である、という見解についてである。これは主に語彙や文体のレベルで議論されてきた。ルカ福音書と使徒言行録の間には、語彙のレベルや文体のレベルで、多くの類似点が見られるが、そればかりでなく相違点も見られるのである。語彙や文体の相違点は、最初に J. C. ホーキンスによって指摘されたが<sup>(4)</sup>、A. C. クラークはここからさらに一步議論を進めて、ルカ福音書と使徒言行録が、異なる著者によって著された別々の著作である、という説を立てた<sup>(5)</sup>。これに対して、W. L. ノックスは、語彙や文体の相違は、著者が用いる資料の違いに由来し、同一の著者が違った目的で、違った状況の中で書いていることによると反論した<sup>(6)</sup>。

1970年代に入って、この問題が再燃し、A. W. アーヰルは、ルカ文書の一方の著作で用いられている言葉が、他方の著作では別の同義語に代えられている例を枚挙し、両者が別の著者によって書かれたことを示唆した<sup>(7)</sup>。これに対して、B. C. ベックは、アーヰルが同義語としているのは、実は同義語ではないこと、相違は資料の違いによること、また両者には共通の同義語が他に数多く見られることを列挙して反駁した<sup>(8)</sup>。最近では、J. ドーヰが、ルカ文書は同一の著者によって書かれたとしても、両者の間に見られる語彙や文体上の相違点から、文学的統一性を唱える際には、注意深くなければならない点を指摘している<sup>(9)</sup>。

以下では、文体上のいくつかの例を挙げて論じてみたい。ルカ文書が異なる著者によって書かれたという立場の重要な論拠として以下のような事実がしばしば挙げられてきた。すなわち、微小辞 *τέ solitarium* (*καί* を欠く *τέ* の単独用法) が、ルカ福音書には 1 回しか見られないのに対して、使徒言行録では 73 回見られ<sup>(10)</sup>、*μέν (οὐν) solitarium* (*δέ* を欠く *μέν* の単独用法) が、ルカ福音書では 1 回も見られず、使徒言行録で 31 回見られること<sup>(11)</sup>。これに対して、ヘブライ語の **וַיְהִי** の翻訳であるセム語的表現 *καὶ ἐγένετο* が、ルカ福音書では 28 回用いられているのに対し

て、使徒言行録では、5回しか用いられていないことが指摘されてきた<sup>(12)</sup>。

しかしながら、この点のみに注目すると、ルカ福音書と使徒言行録の微小辞の用い方が全く異なり、まるであたかも両著作の著者は別人であるかのような印象を受けるが、τέ solitarium と類似した表現である καί solitarium (δέを欠く καί の単独用法)<sup>(13)</sup>と δέ solitarium (καί や δέ を欠く δέ の単独用法)<sup>(14)</sup>、あるいは καὶ ἐγένετο と類似したセム語的表現である ἐγένετο δέ、あるいは δὲ ἐγένετο<sup>(15)</sup>が、ルカ福音書と使徒言行録の両方に共通して夥しく見られることにも、等しく注目しなければならない。すなわち、τέ solitarium, μέν solitarium, καὶ ἐγένετο のみがルカ文書の一方に偏って見られるからと言って、ルカ文書の著者が異なるとは言えないのである。上述の例に見られるような文体上の違いは、語彙の違いとともに、福音書の内容と使徒言行録の内容という、キリスト教の発展段階の違いを明確にしようとする意図に帰されるばかりでなく、著者の修辭学的意図によることも考えられるのである。

### III

第二に、ルカ福音書と使徒言行録は同じ著者による一続きの著作であったが、それを後に第三者が二つに分割した、という見解についてである。すなわち、ルカ福音書24章50-53節と使徒言行録1章1-5節は、後から追加された挿入箇所である、という立場についてである。これは主に文体のレベルで論じられてきた。この見解は最初に P h . - H . メヌーによって提唱された立場であるが<sup>(16)</sup>、E . トロクメはこれを多少改めて、第一段階でルカ24章50-53節が付け加えられ、第二段階で使徒言行録1章1-5節が挿入された、と考えた<sup>(17)</sup>。これに類似した説として、H . コンツェルマンは、ルカ福音書24章50-53節のみを後の挿入と考える<sup>(18)</sup>。

W . キュンメルは、これらの諸説に対して以下のような理由で反論した<sup>(19)</sup>。第一に、ルカ福音書ではイエスの昇天が復活直後にベタニヤで起こったとされているのに対して、使徒言行録では昇天がイエスの復活の40日後にオリーブ山で起こったとされている点に注目すると、後から矛盾する話をあえて挿入したとは考えられないこと。第二に、ルカ福音書が書かれた時点では既に福音書という概念が定着しており、もしもルカ福音書と使徒言行録が元来一続きに書かれた著作であったとしたのなら、福音書という枠組の中にイエスの生涯を越えてパウロのローマへの

宣教まで含まれることになるが、それは考えられないこと。第三に、もしも前述の二箇所が挿入箇所であるとするならば、ルカ福音書24章49節の後に使徒言行録1章6節が続いていたはずであるが、それらの文章が繋がらないこと。以上の理由から、これらの二箇所が挿入であるとは考えられないと主張した。

ただし、キュンメル<sup>20</sup>の第二の理由、福音書の概念が定着していた、という判断はやや早計であると思われることを付け加えておきたい。ルカ文書が著作された時点では、福音書の概念がなおも流動的であったことは、受難物語と復活物語でクライマックスに達する共観福音書（マルコ、マタイ、ルカ）やヨハネ福音書とは全く異なり、受難物語や復活物語を欠き、イエスの言葉集のみで成り立っていた“Q”（イエス語録集）やトマス福音書が存在すること、あるいはイエスの口頭伝承が福音書が書かれた時点でなおも浮遊していたことなどからも明らかだからである<sup>(20)</sup>。

ルカ福音書24章50-53節の昇天記事が、後からの挿入ではなく、最初からテキストの中にあつたことは、ルカ福音書の中間部にあたるサマリア旅行部の冒頭で、「彼（すなわち、イエス）が挙げられる日が近づき」（9：51）、と昇天について前もってテキストの中で言及していることから明らかである。ルカ福音書9章51節が後からの挿入文でないことは、そこに見られる語彙、文体、ルカ特有の思想内容から明白である。尚、イエスの生涯を描いたルカ福音書が昇天物語をもって終わる、という考え方は、他の福音書には見られないルカ文書に顕著なものであるが、ルカ福音書9章51節ばかりでなく、使徒言行録1章2節「聖霊によって選ばれた使徒達に命じて、天に挙げられる日にまで及んだ」という下りにも見られる。

ルカ文書で昇天物語が福音書の終わりの物語的モチーフ（24：50-53）をなすばかりでなく、使徒言行録の始まりの物語的モチーフ（1：6-11）をなすことは、最近になってM. C. パーソンズが歴史的文脈ととりわけ物語的文脈に関して詳細に議論して明らかにした<sup>(21)</sup>。ルカ文書の第1巻の終わりと第2巻の始まりに昇天物語が繰り返されているのは、重要な局面で物語を繰り返す、ルカ文書の著者の修辞学的手法によるのである。このように繰り返して物語る手法は、使徒言行録で重要な局面をなすパウロの回心物語（使徒9，22，26章）<sup>(22)</sup>やコルネリウスの回心物語（使徒10，11章）においても見られる。以上のような点から、ルカ文書が一続きの著作として書かれた後に、何らかの理由で第三者によって二つの著作に分割されたとは考えられないのである。

## IV

第三に、ルカ福音書と使徒言行録は、同じ著者によって書かれたが、ルカ福音書を書いた時点では、使徒言行録を書くつもりはなく、しばくしてからルカ福音書の続編として使徒言行録を付け加えた、という見解についてである。すなわち、この立場では、ルカ福音書と使徒言行録の相違点を強調し、両者の文学的ジャンルの違いを指摘する。

しかし、このような見解を支持する研究者達は、ルカ文書が書かれた時点では、福音書という概念がすでに確立して定着していた、という先入観をしばしば前提にしているように思われる。また、これと関連して、「福音書」と「使徒言行録」という、後に付け加えられた文書のタイトルに、意識していよう無意識であろうとにかかわらず、捉えられているように思われる。

ルカ文書が書かれた時点では、それぞれの文書のオリジナル版には「福音書」とか「使徒言行録」というタイトルが付けられていなかったと思われる。それは、ルカ福音書の序文の中で、ルカ福音書を「福音書」(εὐαγγέλιον) とは呼ばずに、一つの「叙述」ないしは「物語」(διήγησις, ルカ 1 : 1) としか呼ばず、また使徒言行録の序文では、先行する著作であるルカ福音書を「福音書」と呼ばずに、ただ「第 1 卷」(πρῶτος λόγος, 使徒 1 : 1) としか呼んでいないことから傍証される。現在残されている写本や新約聖書の最も古い正典の諸リストには、ルカ文書の第 1 卷と第 2 卷を連続して一つの羊皮紙に書いた写本や両者を並置した正典のリストはないが、「第 1 卷」という呼称からも、ルカ文書の二つの著作が原初は連続して並び置かれ、両者で一体をなす文書であったことは、想像に難くない。そして、ルカ文書の第 1 卷と第 2 卷にそれぞれ「福音書」と「使徒言行録」というタイトルが付けられたのは、2 世紀後半であったと思われるが<sup>(23)</sup>、タイトルが付けられた時点では、それぞれ別のジャンルであると考えられたのである<sup>(24)</sup>。

ルカ文書が第 1 卷と第 2 卷の連続した同じジャンルの著作であることは、まず第一に、第 1 卷の終わりと第 2 卷の始まりに両者を結びつける連結部 (linkage) があることによっても明らかである。この連結部では、昇天物語が繰り返されるばかりでなく (ルカ 24 : 50-53, 使徒 1 : 9-11)、イエスの死と復活の証人となること、異邦人世界へ宣教が展開すること、霊が与えられること、それまでエルサレムにとどまることも含まれている (ルカ 24 : 46-49, 使徒 1 : 4-8)。また、第二に、第 1 卷と

第2巻の冒頭にも共通な要素が見られることによっても明らかである。すなわち、それぞれに序文があり、同じテオフィロに献げられた献呈の言葉があることから明らかである。

しかしながら、パーソンズとパーヴォはルカ文書の第1巻の終わりの昇天物語と第2巻の始まりの昇天物語の時期や場所の違いに注目する。すなわち、ルカ福音書ではイエスの昇天が復活直後にベタニヤで起こったと想定されているのに対して、使徒言行録では昇天が復活の40日後となり、その場所がベタニヤ付近のオリブ山と特定され、二人の天使との対話が新たに導入されている。このような点で多様性が見られることは、物語的統一性を破るものであることを示唆すると彼らは考える<sup>(25)</sup>。だが、このように繰り返し物語るうちに、詳しい叙述を新たに付け加えていく方法は、パウロの回心物語に典型的に見られるように、ルカ文書の著者に特有な修辞学的な語り口によるものであり、第1巻と第2巻のジャンルの相違を示唆するものではない。

ルカ福音書の序文が、福音書のみ序文であるのか、それともルカ文書全体への序文であるのか、という点については、論争されてきた。しかし、この点については、既にキャドベリーが、ルカ福音書の序文はヘレニズムの歴史的著作の習慣にならった、ルカ文書全体への序文であることを明らかにしている<sup>(26)</sup>。だが、パーソンズとパーヴォは、そのような例が今までに挙げられたことがないことを指摘し、それによってルカ福音書の序文がルカ文書全体への序文ではなく福音書のみ序文であり、ルカ福音書と使徒言行録の物語的統一性がないことを示唆する<sup>(27)</sup>。このようなキャドベリーへの反論に対して、ここでは、現在では失われてしまったエフォロスとディオドーロスの歴史的著作の第1巻序文の断片の中に、このような歴史的著作全体への序文の例が見られることをまず指摘しておきたい<sup>(28)</sup>。

また、パーソンズとパーヴォは、ルカ福音書の結末とヨセフスの『アピオン反駁』第1巻の結末ならびにフィロンの『モーセ伝』第1巻の結末を比較し、前者には第2巻への言及がないのに対し、後者の二著作には第2巻への言及があるので、ルカ福音書と使徒言行録は物語的統一性が見られないことを示唆し、ルカ福音書の序文は物語的統一性を証明するものでも反証するものでもなく、使徒言行録はルカ福音書の続きとして後から付け加えられたものである、と主張する<sup>(29)</sup>。

しかし、ここではルカ福音書の結末に第2巻への言及が見られるか見られないかは重要なことではなく、ルカ福音書の序文を以下のように詳

細に検討すると、その中にルカ文書全体を視野に入れた物語的統一性が意図されていることを次に指摘しておきたい。すなわち<sup>(30)</sup>、

(1) 「私達の間で確信させられている（成就された、あるいは成し遂げられた）事柄について」（ルカ1：1）の「事柄」（*πράγματα*）は複数形で書かれており、ルカ福音書に描かれたイエスの「死・復活」という一つの救いの出来事以上の、一連の出来事を指し示していると思われる。また、後に詳しく論じるように、ルカ文書における預言の成就是、ルカ福音書ばかりでなく、使徒言行録にも数多く見られるので<sup>(31)</sup>、成就され確信されている出来事はルカ文書全体に及んでいると考えられる。

(2) 「始めからの目撃者でみ言葉に仕えるようになった人々が私達に伝えた通りに」（ルカ1：2）の「始めからの目撃者で（その後）み言葉に仕えるようになった人々」（*οἱ ἀπ' ἀρχῆς αὐτόπται καὶ ὑπηρέται*）とは、イエスの出来事の「証人」（*μάρτυς*）という言葉とほぼ同義語である。しかし、使徒言行録ではパウロもイエスの復活の証人であり（9, 22, 26章）、「仕える人で証人」（26：16, *ὑπηρέτης καὶ μάρτυς*）と呼ばれており、「目撃者でみ言葉に仕えるようになった人々」の中に含まれることが示唆される。従って、「私達に伝えた」「事柄」とは、ルカ福音書の伝承ばかりでなく、使徒言行録の伝承<sup>(32)</sup>も含まれると考えられる。

(3) 「私も最初から全てを正確に調べて、あなたに順序よく書くことにしました」（ルカ1：3）の「順序よく」（*καθεξῆς*）は、修辭学的に「秩序よく配列して」の意味であるが<sup>(33)</sup>、後述するように、ルカ福音書ばかりでなく使徒言行録も、同じような登場人物群が用いられ、類似した構造の物語世界として語られ、その中で修辭学的技法を用いて「順序よく」描かれていく。従って、「順序よく」書かれたのはルカ福音書ばかりでなく、使徒言行録も含まれると考えられる。

(4) さらに、「それは教えられた言葉が確実であることをあなたが知るためです」（ルカ1：4）の「言葉」（*λόγοι*）は複数形で書かれているが、それはルカ福音書のイエスの教えを指すばかりでなく、イエスの「死・復活」について述べた使徒言行録の使徒的宣教の言葉も含まれると考えられる。すなわち、テオフィロが伝承として伝えられた教えが確実であるか否かが問題になるのは、イエスの言葉だけを指すのではなく、それに基づいてイエスの「死・復活」の意義を説いた使徒的宣教の言葉なのである。

以上に述べた諸点から、ルカ福音書の序文は、ルカ文書全体を視野に入れて書かれたものであり、使徒言行録はルカ福音書と文学的ジャンル

が異なり、その後から付け加えられた続編である、とは言えないと思われる。

## V

最後に、ルカ福音書と使徒言行録は同じ著者によって書かれた統一した著作であり、両著作は同時に構想されたもので、文学的統一性とりわけ物語的統一性が見られる、という見解についてである。バレットは、ルカ福音書で取り扱われたモチーフが使徒言行録で引き続いて言及されている箇所を41箇所挙げて、両著作の関連性を確認し、ルカ福音書と使徒言行録の関係は、福音書が主体で行伝がそれを確認するのでもなく、行伝が主体で福音書がそれに先行するのでもなく、両者は相補的であり、マルキオンの「福音書」と「使徒書」とから成る新約聖書の原型に準えられるものであることを指摘する<sup>(34)</sup>。

バレットの指摘は概ね正しいが、しかし、ルカ福音書で言及されたことが使徒言行録で思い出される記述はない<sup>(35)</sup>、と述べている点は、使徒言行録の世界的権威には珍しい見落としとしてである<sup>(36)</sup>。ルカ福音書と使徒言行録の文学的モチーフの一貫性という視点から見てこの点は重要であるので一例だけ付け加えておきたい。すなわち、ルカ福音書でシメオンに与えられた預言の言葉、イエスの救いがユダヤ人ばかりでなく異邦人にも及ぶことを預言した「異邦人を照らす光」(ルカ2:32)という言葉は、ルカ福音書では成就されずに(ルカ24:47)、使徒言行録で初めて成就されるが、エルサレムの使徒会議で公に異邦人を受け入れる際に、このシメオンの言葉が記憶されるのである(使徒15:14)。しかも、「異邦人への光」(使徒13:47=イザヤ49:6。使徒9:15、参照)としてパウロが立てられ、すなわちイエスの言わば後継者としてパウロが立てられ、ローマの異邦人にまでイエスの救いを伝えるのである(使徒28:28)。

また、ルカ福音書と使徒言行録が文学的に統一した著作であることを例証するものとして、ルカ福音書では資料として用いているマルコ福音書の叙述を省略して描き、それを使徒言行録の叙述に移行して用いる場合がある。その一例として、マルコ福音書でのイエスの神殿を汚す言葉(14:55-59)は、ルカ福音書のイエスの裁判の叙述では省略されているが(22:66-71)、使徒言行録でステファノの神殿を汚す言葉の叙述にそのまま用いられている<sup>(37)</sup>。これはかなり周到な一貫性への意図と念入



りな文学的構想がないとできないことである。

さらに、ルカ文書には他の福音書と同じように預言の成就という考え方が見られるが、旧約聖書で預言された言葉がルカ文書で成就された箇所を除いて、ルカ文書で預言され、それがルカ文書内で成就する箇所に限って以下の表1に示す。この表の中で、とりわけルカ文書の文学的統一性と一貫性を示しているのは、シメオンの預言の言葉のように記憶が蘇るとい形式を用いているにせよ用いていないにせよ、ルカ福音書で預言された言葉がルカ福音書では成就されずに、使徒言行録で成就される箇所である（以下の表1の中で\*印が付いている箇所）。

(表1) ルカ文書における預言と成就

〈預言事項〉	〈預言箇所〉	〈成就箇所〉
1. 洗礼者ヨハネの誕生・命名・職務	ルカ1:13-17	ルカ1:41,44-45,57-66,3:3-17
2. イエスの誕生・命名	ルカ1:26-31	ルカ2:1-7,21
3. いと高き方の子と呼ばれる	ルカ1:32 a	ルカ8:28
*4. ダビデの王座を継ぐ	ルカ1:32 b	使2:30
5. イエスに聖霊が下る	ルカ1:35 a	ルカ3:22
6. 聖なる者、神の子と呼ばれる	ルカ1:35 b	ルカ4:34,41, 使9:20
7. イエスの生涯	ルカ1:51-53	ルカ4-24章
8. 洗礼者ヨハネの生涯	ルカ1:76-77	ルカ3:1-20
9. 救い主の誕生	ルカ2:8-12	ルカ2:15-20
*10. 異邦人に対する救い	ルカ1:29-32	使2-28章(15:13-14)
11. 受難と復活	ルカ9:22,44, 18:32-33	ルカ22-24章
*12. 聖霊の付与	ルカ11:13 24:47-49	使2:1-4 使1:4-5
*13. キリスト教徒への迫害・弁明	ルカ21:12-17	使6:10,8:3,12:4,22-26章
14. 過越の食事の準備	ルカ22:10-12	ルカ22:13
15. ペトロの否認	ルカ22:34	ルカ22:54-61
16. キリストの証人	使1:8	使2-28章
17. 飢餓の到来	使11:27-28 a	使11:28b
18. コリントでのパウロの加護	使18:9-10	使18:12-17
19. エルサレムでのパウロの逮捕	使21:10-11	使21:30-36
20. 難破船からのパウロの救出	使27:21-26	使27:44

## VI

ルカ文書の文学的統一性や一貫性を示すさまざまなモチーフの例をⅣ～Ⅴで見てきたが、以下ではルカ文書の物語的統一性を示す登場人物群や物語的構造、またそこに一貫して見られる物語的モチーフについて述べてみたい。その際に、物語的統一性について論じてきた、J. タイソン、R. タンネヒル、J. A. ダーらの先行的研究<sup>(38)</sup>を参考にするばかりでなく、これらの研究がR. ショウルズ=R. ケログ、S. チャットマン、W. ブース、らの現代の文学批評理論<sup>(39)</sup>に基づいてなされているのに対して、本稿では現代の構造主義的な文学批評理論をも念頭に置きつつ、とりわけ主要な点で先行的研究ではまだ論じられていないアリストテレスの『詩学』という古代の文学批評理論に論拠を求めて、物語的統一性を解明してみたい<sup>(40)</sup>。

ルカ文書の現実の著者と現実の読者は、ほとんど明らかではないが、ルカ文書の両著作からはそれらに内包された著者と内包された読者が明らかにされるのである。またその際に、ルカ福音書の「私」とは、現実の著者でもなく、内包された著者でもなく、この物語世界の語り手を指すのであり、また「テオフィロ」とは、現実の読者でもなく、内包された読者でもなく、その聴き手を指すのである。この「私」と「テオフィロ」との間にルカ文書の物語世界が展開されるのである<sup>(41)</sup>。この物語世界は一貫しており、その主要な登場人物の役割もルカ福音書と使徒言行録で一貫しているのである。

ルカ文書の物語世界の主要な登場人物群は、四つに分けられる。すなわち、(1) 物語世界の主人公。第1巻のルカ福音書では主人公としてイエス、第2巻の前半ではペトロ、後半ではパウロが登場する。(2) 主人公達と敵対する反主人公である宗教的権力者。第1巻の前半ではフェリサイ派の人々ならびに律法学者として登場するが、後半では祭司長・長老・律法学者ならびにサドカイ派の人々として登場する。第2巻では、ほぼ第1巻と同じく祭司長・長老・律法学者ならびにフェリサイ派の人々とサドカイ派の人々、さらに議員や神殿守衛長らとして登場する。(3) 主人公に最も近い存在である弟子達。弟子達は第2巻では使徒達や兄弟達などのキリスト教徒を表わす言葉にも置き替えられていく。(4) 弟子達の外側に置かれた民衆ないしは群衆。民衆や群衆は第1巻ではイスラエル人としても登場し、第2巻ではユダヤ人、異邦人としても表わされる。

以上のようなルカ文書の物語世界に登場する「主人公」「宗教的権力者」「弟子達」「民衆」という人物群の役割は、V. プロップが『民話の形態学』で用いた「主人公」「敵対者」「助手」「対象」という概念に近い。あるいはA. J. グレマスの『構造意味論』の「主人公」「敵対者・反対者」「補助者」や、C. ブレモンが『物語のイメージ』で用いた「主人公」「敵・競争者」「味方・同盟者」「受益者」という概念に類似している<sup>(42)</sup>。

この他、ルカ文書の物語世界には主要な人物の脇役として、主人公イエスの登場に先立って先駆者の役割を果たす洗礼者ヨハネや、主人公と反主人公との葛藤場面でしばしば第三者的な役割を果たすヘロデやローマの高官らの政治的権力者も登場する（「味方」「敵」「第三者」という「第三者」を入れた役割に関しては、アリストテレス『詩学』14:4, 1453b 15-17, φίλοι, ἐχθροί, μηδέτεροι, 参照<sup>(43)</sup>）。しかし、これらの人物群の背後には、神とサタンという人間を越えた存在が控えており、これらの天上と地下の超越的存在から派遣された聖霊や悪霊が地上の登場人物群に影響力を及ぼすのである。

ルカ文書の物語世界の登場人物群が、第1巻のルカ福音書と第2巻の使徒言行録で、基本的にはほとんど変わりなく、一貫しているばかりでなく、ルカ文書の物語世界の構造も以下の表2に見られるように極めて似かよっており、この点においても一貫性が見られるのである。

(表2) ルカ文書の物語世界の構造	
〈ルカ福音書〉	〈使徒言行録〉
(0) 誕生物語（前物語）	1-2章
(1) 主人公の登場	3章-4:13
(2) ガリラヤ宣教	4:14-9:50
(3) サマリア旅行	9:51-19:44
(4) エルサレム宣教	19:45-21章
(5) 受難物語	22-23章
(6) 復活物語	24章
	(1) 後継者の登場 1章
	(2) エルサレム宣教 2-7章
	(3) ユダヤ・サマリア宣教 8-12章
	(4) パウロの宣教旅行 13-20章
	(5) パウロの逮捕・弁明 21-26章
	(6) ローマへの道 27-28章

ルカ福音書は、先駆者である洗礼者ヨハネと主人公イエスの誕生物語という幕前劇にあたる前物語から始まり、主人公イエスが登場した後に、

ガリラヤの部、サマリアの部、エルサレムの部と主要部分が三幕に分けられる。そして、最後に受難物語で主人公の運命が大きく変わり、結末の復活物語で終わる。これに対して、使徒言行録では、主人公イエスが天に挙げられた後に、使徒達がその後継者として登場する。「エルサレム、ユダヤ・サマリア、地の果てまで」(使徒1:8) イエスの死と復活の証人達の物語は展開する。「地の果てまで」は、具体的にはパウロの三度の宣教旅行、エルサレムでの逮捕と三度の弁明、ローマへの道の物語として語られる。

ルカ文書の物語世界は、それぞれ大きく分けて「始め」「中」「終わり」の三部で構成される(アリストテレス『詩学』7:3, 1450b; ἀρχή, μέσον, τελευτή, 比較)。すなわち、第1巻のルカ福音書では、導入の誕生物語の後で、主人公の登場とガリラヤ宣教が「始め」にあたり、サマリア旅行が「中」であり、エルサレム宣教から受難物語そして復活物語が「終わり」にあたる。また、第2巻の使徒言行録では、後継者の登場、エルサレム宣教、ユダヤ・サマリア宣教が「始め」にあたり、パウロの三度の宣教旅行が「中」であり、パウロの逮捕・弁明、ローマへの道が「終わり」にあたる。両著作とも、その中間部にイエスのサマリア旅行とパウロの宣教旅行という旅行を対応させて描いている。しかも、両著作とも、主人公と宗教的権力者の「葛藤」によって、物語の筋立て(プロット)が展開する。また、物語が展開していくに従って、主人公と宗教的権力者の葛藤が次第に高まっていく(表2の(2)-(4)、参照)。そして、最後にはその頂点に達するのである(表2の(5)、参照)。その葛藤が頂点に達した後に、急激に転換して、それぞれ「解決」に向かうのである(表2の(6)、参照。アリストテレス『詩学』18:1, 1455b 24-32; ὁδός, λύσις, 比較)。

ルカ文書のそれぞれの著作が物語的統一性を念頭に置いて叙述されていることは、両著作の物語世界の登場人物群と物語的構造が極めて似ているばかりでなく、第1巻と第2巻の主人公達あるいは反主人公である宗教的権力者などの主要な登場人物の描写に同一のモチーフが数多く見られることによっても明らかにされる。とりわけ重要なのは、イエスとパウロ、イエスとペトロなどの第1巻と第2巻の主人公達の平行関係である。以下の表3に示すように、イエスとペトロとパウロの描写には、夥しく多岐に渡って重複したモチーフが見られる。

(表3) ルカ文書の主人公の平行関係

〈叙述事項〉	〈イエス〉	〈ペトロ〉	〈パウロ〉
1. 律法を遵守	ルカ2:21-24,41-42		使23:3,23:6,24:4-5, 16:3-4,18:18,21:21-6
2. 律法廃棄を批判	使6:14		使21:21
3. 会堂で教える	ルカ4:15,16-30,33,44 6:6-11,13:10		使9:20,13:5,14-43,14:1 17:1-4,10,17,18:4,19 26,19:8
4. 選びの器	ルカ9:35,23:35		使9:15
5. 闇の光異邦人の光	ルカ1:79,2:30-32		使26:18,13:47
6. 神的運命の支配	ルカ2:49,4:43,13:33 17:25,24:7,26,使3:21		使9:6,16,19:21,23:11, 25:10,27:24,26
7. 霊と力に満ちる	ルカ4:1,14, 使10:38	使2:1-4,4:8	使9:17,13:1-3,4
8. 神の国の宣教	ルカ4:43,8:11,9:11, 16:16,使1:3		使14:22,19:8,20:25, 28:23,31
9. 神の人の印 (奇跡)	ルカ4:40-41,6:17-19	使2:43,5:12	使14:3,28:9
(1) 悪霊祓い	ルカ4:31-37,8:26-39, 9:37-43,使10:38		使16:16-18
(2) 癒し (足)	ルカ5:17-26	使3:1-10,9:32-5	使14:8-14
(3) 死者の蘇生	ルカ7:11-17	使9:36-43	使20:9-12
10. 幻を見る	ルカ3:21-22,9:28-36, 10:18	使10:9-16 11:5-10	使9:3-6,16:6-10, 18:9-10,22:6-21, 23:11,26:12-17
11. 天使が現れる	(ルカ1:5-25,26-38, 2:8-20)22:43	使5:19,12:7-10	使27:23
12. 祈る	ルカ4:42,5:16,6:12, 9:18,11:1, 22:39-46	使1:14,2:42,3:1 4:23-31,10:9 11:5	使9:11,17,11:3,14:23, 16:25,20:36,21:5, 28:8
13. 派遣の使命 (宣教旅行)	ルカ4:43(8:1) ルカ9:51-19:27	使9:32-11:18	使22:21 使13:1-21:16
14. エルサレム行の覚悟	ルカ9:51-62,13:32-33		使21:10-14
15. 最後の説教	ルカ21:5-38		使20:17-38
16. 最期の予告	ルカ9:22,44,12:50 13:32-33,17:25,18:31-33		使19:21,20:22-25,21:11
17. エルサレムでの逮捕	ルカ22:47-65	使12:1-5	使21:17-36
18. 尋問と裁判 (1)	ルカ22:66-71	使4:5-22	使22:30-23:10
	(サンヘドリン)	(サンヘドリン)	(サンヘドリン)
(2)	23:1-5 (ピラト)	5:17-42 (サンヘドリン)	24:1-23 (フェリクス)
(3)	23:6-12 (ヘロデ・アンティパス)	12:1-4 (サンヘドリン)	25:1-12 (フェスト)
(4)	23:13-25 (ピラト)		26:1-32 (ヘロデ・アグリッパ)

しかし、以上のような主人公達の平行関係を示すモチーフが見られる、というだけでは、ルカ福音書と使徒言行録が物語的に統一して一貫した著作であるとは、必ずしも言えない。両著作の主人公達が一つの物語世界の中で、同じような役割と機能を果たしているか否かが問題となる。ルカ福音書の主人公イエスは、しばしばユダヤ教の会堂や神殿で宗教的権力者と対立して、次第に葛藤が深まっていく。そして、サンヘドリンで尋問され、裁判を受けるのである。使徒言行録においても、主人公のペトロとパウロは、ユダヤ人と対立を深めて、サンヘドリンで捕らえられ、尋問されたり、弁明したりする<sup>(44)</sup>。

そして、ルカ福音書の主人公イエスは霊と力に満たされて神の国を語り教え、病気を癒し悪霊を追い出して輝かしい業を行なう神の人から（ルカ4-21章）、苦難の僕へと運命が転換し、ゲッセマネの園で自分の最期を認知し、十字架の上で苦難を受けるのである（ルカ22-23章）。それと同様に、使徒言行録の前半の主人公ペトロは、ユダヤ人宣教に従事する立場から（使徒2-5、9章後半）、異邦人宣教を認める立場に転換して、コルネリウスの回心物語で運命の転換を認知し（使徒10-11章）、その直後に迫害で苦難を受けるのである（使徒12章）。使徒言行録後半の主人公パウロは、ダマスコ途上で復活したキリストと出会いキリスト教の迫害者からキリスト教の宣教者へと運命を転換するが、その直後に苦難を負った生涯となる自分の運命を認知し（使徒9、22、26章）、とりわけその生涯の晩年には苦難の運命が待ち受けているのである（使徒20-27章）。

以上のような主人公の運命の「転換」、その「認知」、それらにともなう「苦難」は、悲劇の重要な三つの要素である（アリストテレス『詩学』11:1-6; 1452a 22-1452b 13; *περιπέτεια, ἀναγνωρίσις, πάθος*）。ルカ文書の主人公達の描写には、類似したモチーフが夥しく見られるばかりでなく、主人公のイエスとパウロの場合は特にそうであるが、物語世界で葛藤が高まり、とりわけ宗教的権力者との緊張と対立が頂点に達する中で、主人公の運命の転換、認知、苦難という悲劇的な側面が露呈され、主人公の主題的役割も一致し、物語世界で同じような機能を果たすことが一貫して描かれるのである。このようなわけで、ルカ文書は著者が構想した段階から、文学的に、とりわけ物語的に統一した著作として意図されたものであることが明らかである<sup>(45)</sup>。

## 註

\*本稿は、1996年3月29日に関東学院大学で開催された日本基督教学会関東支部会で発表した論文「ルカ文書の物語的統一性」という原稿を書き改めたものである。

- (1) H.Cadbury, *The Making of Luke-Acts*, London: SPCK, 1968 (1st ed. New York: Macmillan, 1927). 統一性を主張する研究者は“Luke-Acts”と表記し、多様性を主張する研究者は“Luke & Acts”と表記する傾向があると思われる。本稿では、それらの代わりに「ルカ文書」(the Lukan writings) という名称を用いる。尚、ドイツ語圏では、ルカ福音書と使徒言行録を纏めて表現する際に、一般的に“das lukanische Doppelwerk”と表記する傾向がある。
- (2) M.C.Parsons & R.I.Pervo, *Rethinking the Unity of Luke & Acts*, Minneapolis: Fortress, 1993.
- (3) C.K.Barrett, “The Third Gospel as a Preface to Acts?” F.van Segbroek (et al.eds.), *The Four Gospels: Festschrift Frans Neirynck*, Leuvan: Leuvan Univ. Press, 1992, vol.2, 1451-1466; I.H.Marshall, “Acts and the ‘Former Treatise’,” B.W.Winter & A.D.Clarke (eds.), *The Book of Acts in Its First Century Setting, vol.1 Ancient Literary Setting*, Grand Rapids: Eerdmans / Carlisle: Paternoster, 1993, 163-182.
- (4) J.C.Hawkins, *Horae Synopticae*, Oxford: Clarendon Press, 1902, 174-182.
- (5) A.C.Clark, *The Acts of the Apostles*, Oxford: Clarendon Press, 1933, 393-405.
- (6) W.L.Knox, *The Acts of the Apostles*, Cambridge: Cambridge Univ.Press, 1948, 1-15.
- (7) A.W.Argyle, “The Greek of Luke and Acts,” *New Testament Studies* 20 (1974), 441-445.
- (8) B.E.Beck, “The Common Authorship of Luke and Acts,” *New Testament Studies* 23 (1976-7), 346-352.
- (9) J.Dawsey, “The Literary Unity of Luke-Acts,” *New Testament Studies* 35 (1989), 48-66.
- (10) ルカ24:20; 使徒1:15, 33, 37, 40, 43, 4:13, 14, 33, 5:19, 35, 6:7, 7:26, 8:3, 13, 25, 28, 31, 9:3, 15, 10:22, 28, 33, 11:21, 12:6, 12, 17, 13:4, 11, 46, 52, 14:11, 12, 13, 15:4, 5, 6, 16:13, 23, 34, 38, 17:19, 26, 18:26, 19:11, 29, 20:3, 7, 35, 21:18(dis), 31, 37, 22:8, 23:5, 10, 12, 28, 24:10, 27, 25:16, 26:4, 14, 27:3, 5, 8, 17, 20, 21, 29, 43, 28:2, 23, 25.
- (11) 使徒1:1, 6, 18, 2:4, 3:13(dis), 21(dis), 5:41, 8:25, 9:31, 11:19, 13:4, 14:3, 15:3, 30, 16:5, 17:12, 17, 30, 19:32, 21:39,

- 23:18, 22, 31, 25:4, 26:4, 9, 27:21, 28:22.
- (12) ルカ1:23, 41, 59, 65, 2:15, 46, 4:36, 5:12, 17, 6:49, 7:11, 8:1, 24, 9:18, 29, 33, 35, 11:1, 14:1, 17:11, 14, 19:15, 29, 20:1, 24:4, 15, 30, 51; 使徒2:2, 5:5, 11, 7:29, 10:13.
- (13) ルカ文書に夥しく見られるので省略。
- (14) ルカ文書に夥しく見られるので省略。
- (15) ルカ1:8, 2:1, 6, 3:21, 5:1, 6:1, 6, 12, (48)8:22, 40, 9:28, 37, 51, 11:14, 27, 16:22, 18:35, 22:24, (22:40); 使徒2:6, 43, 4:5, 5:7, 8:1, 9:19, 32, 37, 42, 43, 10:10, 10:25, 11:26, 14:1, 15:39, 16:16, 19:1, 23, 21:1, 5, 21:35, 22:6, 17, 23:9, 12, 28:8, 17.
- (16) Ph.-H.Menoud, "Remarques sur les textes de l'ascension dans Luc-Actes," W.Eltester (Hg.), *Neutestamentliche Studien für R.Bultmann*, Berlin: Töpelmann, 1954, 148-156.
- (17) E.Trocmé, *Le Livre des Actes et l'histoire*, Paris: Presses Universitaires de France, 1957, 31-35 (田川建三訳『使徒行伝と歴史』新教出版社, 1969, 47-52).
- (18) H.Conzelmann, *Die Mitte der Zeit*, Tübingen: J.C.B.Mohr, 1964 (1. Aufl. 1954), 7 Anm.1, 86 Anm.3, 189 Anm.4 (田川建三訳『時の中心』新教出版社, 1976, 23 n.4, 161 n.4, 393 n.2).
- (19) W.G.Kümmel, *Introduction to the New Testament*, London: SCM, 1979 (orig. Heidelberg: Quelle & Meyer, 1973), 156-159.
- (20) Cf. H.Koester, *Ancient Christian Gospels: Their History and Development*, Philadelphia: Trinity Press International / London SCM, 1992; 山田耕太「パウロ以後の展開」『現代聖書講座』第2巻, 日本キリスト教団出版局, 1996, 348-366, 特に360-361参照。
- (21) M.C.Parsons, *The Departure of Jesus in Luke-Acts*, Sheffield: JSOT Press, 1987.
- (22) 三回繰り返されるパウロの回心物語に対する修辞学的分析については、I.J.Jolivet, Jr., "The Lukan Account of Paul's Conversion and Hermagorean Stasis Theory," S.E.Porter & D.Stamps (eds.), *Rhetoric on Scriptures: Essays from the 1996 Malibu Conference* (tentative title), Sheffield: Sheffield Academic Press, forthcoming, 参照。
- (23) ムラトリ正典目録34行目「全使徒行伝」(acta omnium apostolorum)。エイレナイオス『異端反駁』3. 12. 11; 3. 13. 3, テルトウ リアヌス『マルキオン反駁』5.1.6, 「使徒行伝」(acta apostolorum)。
- (24) 後の「行伝文学」、参照。Cf. E.Norden, *Die Antike Kunstprosa*, Stuttgart: B.G.Teubner, 1983 (2. Aufl. Leipzig & Berlin, 1909), Zweiter Bd., 481, "Auch die Apostelgeschichte steht als Literaturgattung ziemlich isoliert da, war aber hellenischem Empfinden lange nicht so fremdartig wie die Evangelien; denn wenn die falsche Vorstellung, daß sie zur Geschichtsschreibung



zu rechnen sei, auch abgetan ist, so mußte sich der Hellene doch schon bei dem—natürlich eben deshalb gewählten—Titel an seine einst recht umfangreiche *πράξεις*-Literatur erinnern fühlen.”

- (25) Parsons & Parvo, *Rethinking*, 60.
- (26) H.Cadbury, “Commentary on the Preface of Luke,” F.J.Foakes-Jackson & K.Lake (eds.), *The Beginnings of Christianity*, London: Macmillan, 1922, vol.2, 489-510, esp., 491-492.
- (27) Parsons & Parvo, *Rethinking*, 61.
- (28) J.Jacoby, *Die Fragmente der griechische Historiker*, Leiden: Brill, 1961, Zweiter Teil A, 70.F.9; R.Laqueur, “Ephoros 1. Die Proömien,” *Hermes* 46 (1911), 161-206; K.S.Sacks, ‘The Lesser Prooemia of Diodorus Siculus,’ *Hermes*, 110 (1982), 434-443.
- (29) Parsons & Parvo, *Rethinking*, 62-64.
- (30) Cf.Marshall, “ ‘Former Treatise’ ,” 172-174, 177.
- (31) Parsons, *Departure*, 83-93; D.Peterson, “The Motif of Fulfilment and the Purpose of Luke-Acts,” B.W.Winter & A.D.Clarke (et al.ed.s.), *The Book of Acts in Its Literary Setting, vol.1, Ancient Literary Setting*, Grand Rapids: Eerdmans / Carlisle: Paternoster, 1993, 83-104.
- (32) K.Yamada, *The Pauline Traditions in the Acts of Apostles* (Ph.D. diss.Durham), Godstone, Surrey: British Thesis Service, 1986; 山田耕太「使徒行伝におけるパウロ伝承」『新約学研究』第15号, 1987, 15-27.
- (33) 山田耕太「ルカ文書の序文と修辞学的歴史」『新約学研究』第22号, 1994, 53-54; 山田耕太「ルカ福音書の序文と歴史叙述」『敬和学園大学研究紀要』第4号, 1995, 1-23; K.Yamada, “The Preface to the Lukan Writings and Rhetorical Historiography,” S.E.Porter & D.Stamps, *Rhetoric on Scriptures: Essays from the 1996 Malibu Conference* (tentative title), Sheffield: Sheffield Academic Press, forthcoming.
- (34) Barrett, “The Third Gospel.”
- (35) Barrett, “The Third Gospel,” 1461.
- (36) バレット教授の定年退職前の最後の年、すなわち1981年度のダラム大学神学部における使徒言行録の講義を10名前後のイギリス人とインド人の学部学生と共に小教室で聴くことができたことを今でも感謝の念をもって思い起こしている。数十年にわたって講義されてきたと思われるノートは、今では700ページにも及ぶI C Cの注解書となって1994年末に出版されたが(C.K.Barrett, *The Book of Acts*, vol.1, Edinburgh: T & T Clark, 1994)、その直後に第2巻が出版される前に亡くなられたのは誠に残念である。
- (37) 荒井献「イエスの『神殿の言葉』—行伝6:14を中心に」『新約学研究』第15号, 1987, 2-14; S.Arai, “Zum ‘Tempelwort’ Jesu in

- Apostelgeschichte 6:14," *New Testament Studies* 34 (1988), 397-410.
- (38) J. Tyson, *The Death of Jesus in Luke-Acts*, Columbia: Univ. of South Carolina Press, 1986; R. Tannehill, *The Narrative Unity of Luke-Acts*, 2 vols, Philadelphia: Fortress, 1986 & 1990; J. A. Darr, *On Character Building*, Louisville: Westminster / John Knox Press, 1992.
- (39) R. Sholes & R. Kellogg, *The Nature of Narrative*, New York: Oxford Univ. Press, 1966; S. Chatman, *Story and Discourse: Narrative Structure in Fiction and Film*, Ithaca, NY: Cornell Univ. Press, 1978; W. C. Booth, *The Rhetoric of Fiction*, Chicago: Univ. of Chicago Press, 1983.
- (40) アリストテレスの『詩学』の視点からマルコ福音書を分析した以下のものを参照、山田耕太「福音書の文学批評-マルコ福音書」『いずみ』第84号, 1994, 1-4; 佐藤研「神と人間の一遭遇様式としての『悲劇』-アリストテレスとマルコ福音書」『現代聖書講座』第2巻, 日本キリスト教団出版局, 1996, 189-210.
- (41) 山田耕太「ルカ福音書の序文」, 11-14, 参照。
- (42) V. プロップ『民話の形態学』(大木伸一訳) 白馬書房, 1972; A. J. グレマス『構造意味論』(田嶋・鳥居訳) 紀伊国屋書店, 1968; C. プレモン『物語のイメージ』(坂上脩訳) 審美社, 1975.
- (43) 山田耕太「使徒行伝における政治的弁明?」『聖書と教会』1987年3月号, 51, 参照。
- (44) ルカ福音書における神殿や会堂での葛藤場面、ルカ4:16-30, 6:6-11, 13:10-17, 19:45-48, 20:1-8, 20-26, 27-40, 41-44, 45-47, 22-23章。使徒言行録における神殿や会堂での葛藤場面、使徒4:1-23, 5:17-42, 6:8-15, 13:42-52, 14:1-5, 17:1-9, 10-15, 21:27-36, 22-26章。
- (45) 以上、本稿では、ルカ文書の文学的、物語的統一性という視点から論じてきた。この原稿を1996年3月29日に関東学院大学で開催された日本基督教学会関東支部会で発表した際に、学会理事である上智大学の高柳俊一教授より「ルカ文書の物語的統一性ということは分かったが、統一性よりも多様性という点から見た方が、現代的で、おもしろいのではないか」という趣旨の興味深い質問を受けた。その時に「統一性と多様性」(Unity and Diversity)ということが脳裏をよぎり、「実は統一性が見られる中にも多様性が見られる。例えば葛藤-解決という構造も、別の所で述べているが、ルカ福音書では閉じた構造になっているのに対して、使徒言行録では読者に判断を委ねて、open-ended になっていて多様性が見られる」とお答えした。すなわち、本稿では、「多様性の中の統一性」(Unity in Diversity)という視点で論じているのである。多様性に関しては以下参照、山田耕太「使徒行伝のジャンル」『新約学研究』第20号, 1992, 2-17; K. Yamada, "A Rhetorical History: The Literary Genre of the Acts of the Apostles," S. E. Porter & Th. H. Olbricht (eds.), *Rhetoric, Scripture and Theology: Essays*

*from the 1994 Pretoria Conference*, Sheffield: Sheffield Academic Press, 1996, 230–250.

## The Narrative Unity of the Lukan Writings

Kota Yamada

### I

The literary unity of the Lukan Writings has almost been accepted since the days of H.Cadbury who coined the hyphenated word “Luke-Acts”. This *opinio communis* is recently questioned by M.C.Parsons & R.I.Parvo at three levels: the genre unity, the narrative unity and the theological unity. On the other hand, C.K.Barrett and H.I.Marshall confirm the literary unity of the Lukan writings these days.

### II

Concerning the opinion that the Lukan writings were written by different authors as different works, it has often been pointed out the differences of Luke and Acts in terms of the language and the style to support their view (A.C.Clark, A.W.Argyle). But such observations were criticised as surface (W.L. Knox, B.E.Beck, J.Dawsey). I would like to point out one issue here as an example. It has often been stated as their reasons that the *τέ* solitarium is seen once in Luke but 73 times in Acts and *μέν* solitarium none in Luke but 31 times in Acts, while Semetic expression of *καὶ ἐγένετο* is utilized 28 times in Luke but 5 times in Acts. Nevertheless, such opinion is absurd from the facts that *καί* solitarium and *δέ* solitarium, which are similar expressions to *τέ* solitarium, and *ἐγένετο ὁδὲ* or *ὁδὲ ἐγένετο*, which are other translations of the same Hebrew word **וַיְהִי** than *καὶ ἐγένετο*, are numerously seen both in Luke and Acts.

### III

Concerning the opinion that the Lukan writings were

originally written in one volume but separated into two, it has been claimed that Lk.24:50-53 and Acts 1:1-5 (or only the latter part) are later interpolations (Ph.-H.Menoud, E.Trocme, H.Conzelmann). If so, it is untenable that the author seems to have added the contradicted ascension story of Lk.24:50-53, which was supposed to happen in Bethany soon after the resurrection, to that of Acts 1:6-11, which occurred at Mt.Olive near Bethany 40 days after the resurrection, and that Lk.24:49 does not connect to Acts 1:6 in terms of sentence (W. Kümmel). Further, it seems unlikely to think Lk.24:50-53 is an interpolation, because the ascension story is unique to the Lukan writings that terminates the first volume, which is already mentioned in Lk.9:51, and initiates the second, which is also mentioned in Acts 1:2. Such repetition of telling the ascension story is owing to the author's narrative technique (M.C.Parsons).

#### IV

Concerning the opinion that the Lukan writings were written by the same author but the second volume was added later to the first as a sequel, the literary differences as well as the generic ones are pointed out (M.C.Parsons=R.I.Parvo). Such position is, consciously or unconsciously, presupposed by the titles added to the manuscripts later, "the Gospel according to Luke" and "the Acts of the Apostels", which indicate the differences of the genre. The literary unity of the Lukan writings is proved by the linkages at the end of the first volume (Lk.24:46-53) and at the beginning of the second (Acts 1:3-11) as well as the prefaces to the two volumes (Lk.1:1-4, Acts 1:1-2). The different descriptions between the ascension stories in the former linkage are on account of narrative technique to add precise information in repetition, which are also seen in other parts of the Lukan writings. The preface to the Gospel, the latter linkage, is intended to cover the whole works as indicated by the plural expressions of "the things that have been convinced

(fulfilled or accomplished) among us” (Lk.1:1) and “the words that you were instructed” (Lk.1:4) which refer not only to the single event and teaching of Christ but to the events afterwards and the Apostolic teachings; further, “the eyewitnesses and ministers” (Lk.1:2) include Paul who is called “a minister and witness” (Acts 26:16); and “(I write to you) in order” covers both volumes as the *dramatis personae* and the narrative structure in two are quite similar to each other and the stories are discoursed orderly in both volumes.

## V

Concerning the opinion that the Lukan writings were written by the same author as unified works, the literary elements of unity are pointed out (C.K.Barrett, I.H.Marshall) as well as the narrative elements of unity. Several examples of the literary consistency to prove that the Lukan writings were conceived and invented at the same time, whether a short time elapsed between the writing of the two volumes or not, are as follows: the words of Simeon to prophesy the Gentile mission (Lk.2:32) is remembered at the scene of the Apostolic Council (Acts 15:14); the words to rebuke Jesus for his defiling the temple are not taken from Mark 14:55-59 to depict the trial of Jesus (Lk.22:66-71), but they are utilised to rebuke Stephen (Acts 6:14); the prophecy-fulfillment motifs are also seen in the Lukan writings, but the several words prophesied in Luke are not fulfilled in the same volume but in the following one, namely Acts (fig.1 no.4, 10, 12, 13).

## VI

The narrative elements of unity are seen in the similar *dramatis personae*: (1) the protagonists, Jesus in the first volume, Peter and Paul in the second, (2) the religious authorities the antagonists, the Pharisees, the Sadducees, the elders, chief priests and scribes, (3) the disciples and the twelve apostles who are the inner circle and close to the heroes, (4) the people

and crowd who are the outer circle and also appear as the Jews and the Gentiles particularly in the second volume. The narrative structure of the two volumes corresponds to each other; (1) each volume is consisted of three parts (Galilee—the journey in Samaria—Jerusalem; Jerusalem/Judea/Samaria—Paul’s missionary journeys—Paul’s trials & the way to Rome (fig.2 (1)–(6)). Cf. Aristotle, *Poetica*, 1450b, the beginning, the middle and the end), (2) the plot of each volume is developed by the conflicts caused by the protagoniosts and antagonists in the missionary scenes and the journey scenes (fig.2 (1)–(4)), is led to the climax in the trial scenes (fig.2 (5)), and conflicts are solved or seem to be solved in the end (fig.2 (6)). Cf. Aristotle, *Poetica*, 1455b 24–32, complication and dénouement), (3) in the descriptions of the protagonists of the first volume and the second, particularly those of Jesus and Paul, numerous pararell motifs are seen in them (fig.3), but reversal of the fortune of the heroes in both volumes (from Jesus the glorious hero with the mighty works and the words of proclamation into Jesus the suffering servant, and Paul the Jewish persecutor of Christianity into Paul the Gentile missionary), recognition of the fortune (the last prayer of Jesus at Mt.Olive and the mission given to Paul at his conversion), and passion (the trials and the crusifixion of Jesus and the trials and the suffering of Paul) (Cf. Aristotle, *Poetica*, 1452a 22–1452b 13, reversal of the fortune, recognition and passion).